

大阪くらしの今昔館所蔵品を巡る

大坂画壇の絵師たち

1. 吉村周山

大阪くらしの今昔館には近世の大坂画壇の絵師による作品が何点か所蔵されています。それらの中から注目すべき作品を紹介していきます。

今回、紹介するのは吉村周山(元禄13~安永2、1700~73)の2点の屏風です。周山は名を充興、号を探仙叟、探興齋などといい、大坂・島之内油町二丁目に住んだ絵師です。狩野派の牲川充信に絵を学び、一家をなして後は大岡春卜と並び称され、法眼(絵師の位の一つ)に叙せられました。寛延3年(1750)刊『和漢名筆画英』、明和4年(1767)刊『和漢名筆画宝』等、古今の名画を写した絵手本を刊行しています。安永6年(1777)刊『難波丸綱目』には、周山の門人が18名も掲載されており、吉村派ともいべき一大勢力を築いていたことが明らかになります。一方で根付の彫刻にも巧みで、天明元年(1781)刊『装剣奇賞』には、根付師の最初に周山の名前が挙げられています。同書によれば、周山は中国の『山海経』『列仙伝図』などに取材し、人の意表をつく怪異な像を制作しましたが、後年ふつりと根付細工をやめて、画道に専念したといえます。安永2年(1773)に没し、下寺町光明寺に葬られました。

「山水図」屏風 紙本墨画淡彩 6曲1双 各160.5×361.8cm

屏風の両端に山景を描き、その間に広々とした水景を配する伝統的な漢画の山水図屏風です。右隻に春夏、左隻に秋冬を配し、春夏の景観には樹木に緑青、水に藍の淡彩が施されています。細部を見ると右隻1、2扇目には画面の始まりにふさわしく、峻厳な筆致で岩松と楼閣が描かれます。雲烟を隔て3、4扇目には水辺の村が描かれています。岩陰の舟に高士の姿があるのは、美しい風景を訪ねて名利を追わぬさまを描く探勝図が屏風の点景として取り入れられたのでしょう。5、6扇目に広がる水景と藍色の遠山は夏を暗示して左隻へと連続します。

左隻に目を移すと右上には雁が飛来し、秋の到来を告げています。3扇目に描かれた彩色のない樹木は秋色を漂わせ、岸辺の芦には雪が降り積もっています。4扇目からは一面の雪景色となっており、樹木はすっかり葉を落としています。橋の上にいる二人はやがて来る客の先触れと迎える者でしょうか。6扇目には雪山の中を驢馬に乗り、供を連れて右手へ向かう高士の姿が描かれています。深山に隠棲する友人を訪れ、清談を楽しむさまを描く訪友図も、漢画に好んで描かれた画題のひとつでした。

周山の画風は規矩の正しい筆致で、古様な画趣を漂わせています。周山の刊行した絵手本には雪舟、周文、秋月などの室



「山水図」屏風右隻

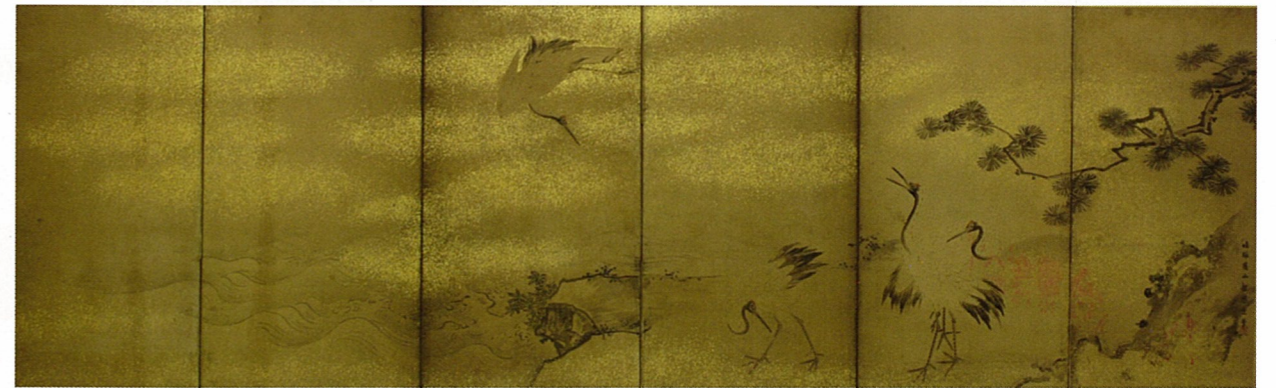


「山水図」屏風左隻

町水墨画の模写が多く含まれており、それらから筆法を摂取したことがうかがえます。しかし構図には余白が多く、狩野探幽(1602~74)に始まる近世狩野派の特徴を表しています。本図は近世狩野派の系譜に

ありながら独自に古画を学び、一家をなした周山の特徴をよく示した作といえるでしょう。両隻に「法眼周山探仙叟筆」の墨署と「探仙叟」の朱文円印があります。

「鶴図」屏風 紙本墨画淡彩 6曲1隻 70.2×220.2cm



「鶴図」屏風

右側に松、2~4扇目には松の下に遊ぶ3羽の鶴と飛翔する鶴、5、6扇目に柔らかな筆致による水流を配しています。左に開いた構図であることから、もとは6曲1双の右隻であったと思われる。金砂子は後世にほどこされたもので、当初は松の緑、丹頂の朱、羽根の白がわずかに彩りを添える淡雅な作でした。

周山は鶴を得意としたようで、現存作には鶴図が数点含まれています。池田市・託明寺

蔵「松梅に鶴図」襖(市指定文化財)、個人蔵「鶴図」に加え、大阪くらしの今昔館蔵「鶴図」襖は襖11面にわたる連作です。本図3扇目の鳴き鶴とその背後の鶴の組み合わせは、個人本や今昔館本にも見られ、下絵を何度も利用したことを窺わせます。首を伸ばし高らかに鳴く鶴、背後でたたずむ鶴、ゆっくりと歩を進める鶴、飛びながら振り返る鶴。それぞれ変化があり呼応しあう構図も手慣れており、

高い完成度を見ることができます。

「鶴の一声」の語が示すように、鶴の鳴き声は鋭く、遠くまで響き渡ります。穏やかな風景の中に一瞬広がる緊張とその後に来る静けさ、本図は高さ70cmという小屏風でありながら、深い情感を漂わせる作です。「法眼周山探仙叟筆」の墨署と「探仙叟印」の白文方印が確認できます。

狩野派に学んだ吉村周山は、手本による学習を重視しましたが、伝来の手本には飽きたらず、自ら古画に学び絵手本を刊行しました。大坂の発達した出版文化に支えられ、これが周山の名をさらに高めたことは想像にかたくありません。大坂画壇が確固たる地位を築くにいたる初期の絵師として、周山の存在は重要であるといえます。

(岩間香 摂南大学教授)

うら話

見どころ

大阪くらしの今昔館が設計段階からこだわった展示の中身や、ふだんは気づかない展示の裏側をご紹介します。



「路地裏の犬の親子」

今回から、大阪くらしの今昔館が設計段階からこだわった展示の中身や、ふだんは気づかない展示の裏側をシリーズで紹介していきます。

最初は、柴犬の親子。町家の大通りを進み路地を入ると、そこに犬の親子が板扉の下にたたずんでいます。その親子は5歳の雌親とその雄の子どもという設定。犬好きの方は「うわぁーかわいい」と頭をなでまわし、苦手な方は「うわっ びっくりした」という反響があり、設計に携わった者としてはかなり満足のいくジオラマのひとつです。



子どもは生後3カ月。当初、子犬が板扉にオシッコする場面にしようとして設計を進めました。ところが調べを進めると、犬は牡でも生後5~6カ月になるまでは片足をあげて用をたさないことが判明。あえなく断念。そして今の親子が見つめ合う姿に落ち着きました。

さらに柴犬は、現代の方が血統が確立しており、江戸時代の方が雑種に近いということも判明。よくよく見ていただくと尻尾の形状や耳の下がり具合がそんな姿になっています。実際に今から130年も前の犬の姿を誰も見たわけではないので言い切ることはできませんが...

さて、ある工房で製作されていたこの親子。型をつくり着色した親子が完成したのは開館2日前。当然のことながら徹夜の連続。早朝、工房のシャッターを開けて運び出すとき、事件が起きました。早朝散歩してい

た近所の犬がほえかかったのです。その瞬間、全員がニマリしたそうです。「やったぜ!」さて、何とかオープンに間に合った犬たち。しかし開館半年で着色した頭と鼻がはげ落ちてきました。設計する方が想定していなかったことが起こっていました。あまりの可愛らしさに、なでられ過ぎたのです。以後もずっとなで続けられるため、半年に一度の化粧直しは今でも続けられています。

ある日、こんな光景を見かけました。母親と3歳くらいの親子連れ。この子は犬が苦手だったのでしょ。子犬を見つけるなり、駆け寄って蹴りを一発。慌てたおかあさんが「そんなことしちゃ犬がかわいそうでしょ」。子どもは今にも泣き出しそうな雰囲気。こちらは躰にもなる犬だと感心しましたが、後で考え直しました。そうか、あの子は本当は痛かったのだ。子犬は強化プラスチックでできているのだ。